

ルカ・シニョレッリの装飾的傾向に関する一試論

—アルチェヴィア、サン・フランチェスコ教会のための《フィリッピーニ祭壇画》を中心に—

九州大学大学院 森結

ルネサンス期の画家ルカ・シニョレッリ(c.1450-1523)による《フィリッピーニ祭壇画》(1508)は、ロッカ・コントラーダ(現在のマルケ州アルチェヴィア)にあるサン・フランチェスコ教会のフィリッピーニ家礼拝堂に設置されていた祭壇画である。かつて祭壇画を構成していた板絵は、18世紀の教会の改装や、ナポレオンによる美術品の接收、フィリッピーニ家の子孫による作品の売却などの結果、現在では世界中に散逸してしまい、その本来の構成は確定しがたい。しかしながら^{ルネッタ}頂画に《聖母の戴冠と父なる神と二人の奏楽の天使》(サン・ディエゴ美術館)、主祭壇画に《玉座の聖母子と聖ヤコブと聖シモン、聖フランチェスコと聖ボナヴェントゥーラ》(ミラノ、ブレラ美術館)が設置されていたことは、多くの研究者の間で意見の一致を見ている。よって、本発表では、主祭壇画とルネッタの板絵に限定し《フィリッピーニ祭壇画》について論ずる。

さて本祭壇画に見られるような金を使用し入念に装飾する傾向は、16世紀初頭のシニョレッリ作品の特徴の一つとして挙げられる。そのような作品群は、金を用いた装飾故に、画家がミケランジェロやラファエッロらによる、同時代の美術の潮流を受け入れることができなかった証、あるいは前時代的な表現への回帰とみなされ、評価が低く見積もられてきた。しかし、従来等閑視されてきた、装飾的モチーフの成立の背景と図像的由来を明らかにするならば、本祭壇画の装飾の語彙が当時有していた意義が理解されるのである。

本発表ではまず、主壇画に描かれた玉座の構造と、その基壇と垂幕における組紐文様による装飾が、ラファエッロによる、ペルージャのサンタントニオ・ディ・パドヴァ女子修道院のために描かれた《コロナ祭壇画》(c.1505、メトロポリタン美術館)を参照していることを指摘する。《コロナ祭壇画》はヴァザーリの列伝によれば、当時非常に注目を集めた祭壇画であり、この事は少なくともウンブリア周辺の他の画家の作品からも看取される。そしてシニョレッリも同祭壇画に着目した画家の一人に数えられるのである。

しかしながら、本祭壇画の装飾は単にラファエッロとの影響からのみ理解されるべきものではない。次に指摘したいのが、本祭壇画の玉座の頭頂の装飾的モチーフと、15世紀末に発見された、皇帝ネロの黄金宮殿内部のグロテスク装飾の「鎖に繋がれたサテュロス」と呼ばれるモチーフとの関係である。これは同時代のグロテスク装飾においてもその流行が確認できるモチーフであり、画家自身のオルヴィエートの礼拝堂装飾における使用も認められる。

以上の指摘を勘案すれば、本祭壇画の装飾は、ラファエッロによる同時代の祭壇画に多くを負い、のみならずグロテスク装飾の流行に倣うものであり、当世流の装飾の語彙を遺憾なく取り入れていることが理解される。従って本祭壇画の装飾は、画家が若い世代の美術の潮流に向き合った上でなお、独自の表現との融合を模索したものとして位置づけられるのである。